

土壤医試験 1 級合格体験記

— 普及活動のツールに土壤診断を —

長澤 さゆり*

1 はじめに

私は大学卒業後山形県職員に採用され、数か所の職場に勤務し、その中で通算9年間野菜の普及指導員の業務に就かせて頂きました。

普及活動を行う中で、栽培経験の長い農業者を支援する機会が多くありました。普及指導員としての経験が浅いのに加え実際栽培したことの無い品目を担当する際には、農業者にどういった切り口で接すれば良いか悩みました。

生育は目で見て判断できる部分が多くありますが、土壌（特に化学性）については見た目ではほとんど分からず、機器や試薬を用いて診断が可能となります。機器や試薬を農業者個々が揃えるのは現実的ではありませんが、普及課にはありましたので、土壌診断は普及活動を行う上で大きなツールとなるのではないかと考えました。

また、直接自分が土壌分析を実施しない場合でも、結果の意味や土壌改良方法が分からないという問い合わせが農業者から寄せられることがありました。

よって、ただ分析するだけではなく土壌についての知識を身につけることで、より普及



活動が中身の濃いものとなり生産性向上につながるのではないかと考えました。

様々な本を購入し読むものの、日々の業務に追われる中でまとまった時間を確保して勉強することはなかなかできませんでした。その折、「土壤医検定試験」ができたのを知り、「試験を目標とすれば、モチベーションが上がってちゃんと勉強できるかな。」と思い、受験しました。初年目は2級を、2年目には1級を受験し、合格することができました。

2 試験対策について

(1) 学科試験・記述試験

試験勉強は、公式テキストを用いました。

私の場合は、2級も1級も第1回目で、どのような問題が出題されるか分からない状態だったため、全体的に書かれていることを理解できるように努めました。

また、2級受験の際には、事前に開催され

*山形県大阪事務所、土壤医

た研修会に参加しました。それぞれの分野の第一線の先生方の講義を受けることができるだけでなく、質問の時間もありました。私の質問にもお答え頂き、大変有意義な研修会でした。1級受験前には日程が合わず参加することができず残念でした。

テキストの勉強のみでは不安な方や先生方の講義を受講してみたい方は、研修会に参加してみてもいいでしょうか。

(2) 業績レポート

1級では、事前にレポートを作成し、試験当日に提出しなければなりません。

レポートは「a. 土づくり指導」、「b. 土づくりに関する調査・研究」、「c. 土づくりの実践」の中から一つ選び、800字以内と大変短い文字数でまとめる必要があります。

私の場合は「a. 土づくり指導」が該当した訳ですが、今までの業務を書き連ねたのでは規定文字数内で何も伝わらないと思い、1つの題材に絞り込んで記載しました。

書く段階になって「そもそもレポートとはどう書くのか？ どう書けば分かりやすいのか？」という所からスタートし、学生に戻った気持ちで勉強し直しました。

そして、私の場合は下記の要領で書きました。

- ①活動対象の概要
- ②プロジェクトの全体像
- ③その中で自分は具体的にどう関わったのか
- ④結果としてどのような成果が出たのか

普及活動は一人で完結するものではなく、先輩方から代々引き継がれてきた成果や、課内及び関係機関との連携等で成り立っていますので、全体像と自分の役割を明確に記載す

る必要があると思いました。

レポートを書くことにより、改めて自分一人では何もできず周囲の皆さんとの連携が重要であると感じました。

3 合格後

土壤医検定試験1級に合格した後、資格登録すると「土壤医」を名乗ることができます。そして、その後も継続研鑽のための研修会参加等が必要となっています。最初は「合格後もそんなに色々しなければいけないの？」と思いました。

しかし、試験勉強を頑張ってもその後何もしなければ忘れてしまいますし、常に情勢が変わったり新技術が開発されたりするので研鑽は必要なことであると思います。むしろ、案内を頂いて研修を受けることができ有難いです。

私は昨年研修会に参加させて頂き、その後の懇親会にも参加して情報交換をすることができました。

4 最後に

日々の業務の合間を縫って勉強をすることは大変でした。しかし、農業の現場に携わる仕事をする上で土壌についての知識は身に付ける必要が出てくるので、いずれどこかで勉強しなければならないと思います。

土壤医検定のテキストにはエッセンスが詰まっていますので、まだ受験していない方は検定試験合格を目指しながら勉強されてはいかがでしょうか。

私は現在は生産現場から離れて流通分野の業務に就いていますが、また現場に戻った際には土壤医の知識を役立てたいと思います。